徒然草を読む

上田三四二

江苏工业学院图书馆
藏书章

徒然草を読む

上田三四二

講談社学術文庫

上田三四二（うえだ　みよじ）
1923年兵庫県に生まれる。京都大学医学部卒業。歌人，文芸評論家，作家。主な著書に，歌集『黙契』『雉』『湧井』『遊行』『照径』，評論集『アララギの病歌人』『斎藤茂吉』『現代歌人論』『西行・実朝・良寛』『眩暈を鎮めるもの』『この世　この生』ほか，創作集『深んど』『花衣』『夏行冬暦』『惜身命』などがある。

講談社学術文庫
定価 680 円

徒然草を読む
上田三四二
昭和61年1月10日　第1刷発行

発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21　〒112
電話・東京(03)945－1111(大代表)

装　幀　蟹江征治
レイアウト　志賀紀子
印　刷　株式会社廣済堂
製　本　株式会社国宝社

© Miyoji Ueda　1986
Printed in Japan
落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-158719-6　(0)　(術E)

徒然草を読む

上田三四二

講談社学術文庫

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「学術文庫」のためのまえがき

本書を繙(ひもと)いて多少なりとも難解の感を抱(いだ)かれる向きは、後半の二章「兼好と世間」「兼好と人間」からはじめていただければと思う。前者は食と色(しき)と名利(みょうり)といった人間的な欲望にたいする兼好の厳しいながらもわけ知りの態度を追って、また後者は、職人的技術をはじめとするさまざまな「道」における名人上手によせる兼好の共感を語って、内容はともに『徒然草』の思想のやわらかく親しみやすい部分に当たる。「無常」にたいする「俗」の部分と言っていいであろうか。

だが本書の核心は、もう一方の「無常」を直視する「兼好と時間」の章にある。「兼好と世間」「兼好と人間」の二章を終わったあとは、ふたたび冒頭にかえって、順を踏みつつ第三章「兼好と時間」を目指していただきたい。難解の感はよほど薄くなっているはずである。

本書の主題をなす兼好の死生観、その無常の自覚を、私は一個の知的関心からのみ追尋したのではなかった。私の兼好追尋は自身の深い内面的な要求から出ていた。

手術によっていったんは癒やされたとはいえ、再発のおそれは発病以後の私の人生を著しく憂色の濃いものとした。死とは何か、生きるとはどういうことか。それまで、取り立てて考えてみたこともなかったそういう問いの前に私の足は立ち止まり、問いのむこうに、隠遁への誘惑があった。私が『徒然草』に出会ったのはそういう時期においてである。

『徒然草』の読み方にはいろいろな立場がある。それがこの類を絶した随筆の幅であり懐ろの深さであるが、私をして言わしむれば、『徒然草』はただ一つのことを切言しているのであった。「先途なき生」と。——人生は有限であり、有限であるばかりか、見給え、人生とは明日知れぬいのちの謂ではないか。ここから兼好の唱導する生き方の極意は、「ただいまの一念」、これである。死後を頼まぬ兼好は、死までの切迫したこの世の生の時間を、時間そのものとなることによって生き切ろうとする。世の大方の求めてやまぬものは、真に生きようとする者にとってはすべて二次的、三次的のものにすぎない。欲望を捨て、煩いを捨てて、人生をして、純粋に、濁りなき時間そのものの筒たらしめること。人生における時間の救出を、兼好はこのように訴える。

さて、かくして得られた純粋時間としての人生という時間の筒は、その筒の先が明日とかぎられているかもしれないにもかかわらず、内部に煩いの一物をもとどめぬ純なる均一性によって、「先途なき生」は「先途なき生」のまま、「心身永閑」の境を現出する。それが兼好

における「つれづれ」の真意である。「されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや。」（第九十三段）――この「楽しまざらんや」を享楽と取ってはならない。「存命の喜び」を純粋時間の筒のうちに、「心身永閑」の無事として味得することを意味している。兼好の隠遁は、その「心身永閑」のための手段にほかならなかった。

死の恐怖を払おうとして、私は大よそ右のように『徒然草』を読み、じじつ、彼の心術の一端に触れたと思ったことであった。本書の行文に、さいわいにある種の力が出ているとすれば、それは私が兼好を単なる知の理解によってではなく、みずからにおける生死の問題に重ねて捉えたことの反映とみていいだろう。

『徒然草』の文章は、私の見るところ、長い歴史を通じての揺るぎない評価にも増して、真に古今に絶した名文というに躊躇しない。本書に数多く引用した段章については、引用ということを越えて、その文章を味わう心得が願わしい。

本書は昭和五十一年に講談社より出版されたものである。いま十年の歳月を経て、ふたたびもとのままの形で「学術文庫」に収められることになったのを喜び、懇切な解説を賜わった宮内豊氏、また出版の面倒をみてくださった学術文庫編集部の池永陽一氏および布宮みつこさんに、感謝申しあげる。

昭和六十年十一月　　上田　三四二

目次

「学術文庫」のためのまえがき……3
一　「方丈記」から「徒然草」へ……11
二　「徒然草」における「つれづれ」……51
三　兼好と時間……82
四　兼好と世間……116
五　兼好と人間……161

六　補　遺……202
隠遁者における後世・現世……202
心と身の論……214
あとがき……222
解　説……宮内　豊……227

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

徒然草を読む

本書は、小社刊『俗と無常――徒然草の世界』（昭和五十一年三月）を底本とし、著者の了解のもとに、表題を『徒然草を読む』と改め、また随時振りがなを付けました。

一　「方丈記」から「徒然草」へ

一

『徒然草』は開巻ただちに一つの激語に出会う。

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（序段）

兼好はこの物狂おしさから出発する。やや強意して言えばそれは一種の狂気であるが、一見、平静そのものと見える兼好の根底に――すくなくとも『徒然草』の出発点に、この狂気の動いていることは軽々に見逃しえない。いったいに人は、狂気なくして世捨人への超出というような行為が可能であるとは思えないが、兼好の場合、『徒然草』はそのもっとも核心的

な部分において、彼が如何にしてみずからの狂気をなだめ、物狂おしさから脱出していったかの心術を語っているように思われる。

物狂おしさから出発した『徒然草』に、しかし二度とふたたび、「狂」の語のあらわれることはない。ただ一ヵ所、第百十二段に「この心をも得ざらん人は物狂ひとも言へ」とあるが、これは人間の内部における狂の自覚やおそれではなく、単に外部の者の眼に、真の世捨人の姿がそのようなものとして映るというにすぎない。念のため、その段を引く。兼好はここで、つまらない世間の儀礼や慣習に心を労して、大切な自分の時間をうしなうことの愚について切言しているのである。

人間の儀式、いづれの事か去り難からぬ。世俗の黙し難きに随ひて、これを必ずとせば、願ひも多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は、雑事の小節にさへられて、空しく暮れなん。日暮れ、塗遠し。吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ。礼儀をも思はじ。この心をも得ざらん人は物狂ひとも言へ、うつゝなし、情なしとも思へ。毀るとも苦しまじ。誉むとも聞き入れじ。（第百十二段・部分）

一途に、諸縁放下による生の純化にいそしむ者の姿に、世人が「物狂ひ」の評をもって向

かうのもやむをえないことである。しかしここには、みずからをかえりみて、「あやしうこそものぐるほしけれ」と、われとわが心をいぶかる迷いのようなものはまったくない。兼好は、序段以来はじめての激語とも言うべきこの第百十二段においても、序段以外の他の段と同じく、彼の内部の物狂おしさを克服しえているのである。

狂の表明から発して狂の克服に向かう『徒然草』――この観点を心に持して『方丈記』に向かうとき、『方丈記』は、狂の秘匿から発して狂の激成に終わった感がふかい。『方丈記』最後の文に読むのは、次のような、なんじ狂せるかというみずからへの問いである。

しづかなる暁、このことわりを思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて、山林にまじはるは、心を修めて道を行はむとなり。しかるを、汝、すがたは聖人にて、心は濁りに染めり。栖はすなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども、保つところは、わづかに周利槃特が行にだに及ばず。若これ、貧賤の報のみづからなやますか、はたまた、妄心のいたりて狂せるか。そのとき、心更に答ふる事なし。只、かたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ。

于時、建暦のふたとせ、やよひのつごもりごろ、桑門の蓮胤、外山の菴にして、これをしるす。

「はたまた、妄心のいたりて狂せるか」。この結語に見る激しい自己断罪は、『方丈記』という一篇の作品をほとんど混乱におとしいれる。言うまでもなく『方丈記』は、例の有名な書き出し――「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまりたる例なし。世中にある人と栖と、またかくのごとし」、こういう無常感より説き起こして、無常の世に、如何にして長明が俗世を離れた閑居のうちに喜びを見いだすようになっていったかを、情理をつくして立証してみせようとしたものだからだ。結語はその彼の立証を、一気に反古にしてしまう。

長明はこの世のはかなく、定めなく、住みにくいさまを、安元の大火、福原への遷都、養和の飢饉、元暦の地震など、彼の四十余年におよぶ半生のあいだに経験してきた災厄に例をとって、それを的確に、迫真的に描く。そしてこう要約する。

世にしたがへば、身くるし。したがはねば、狂せるに似たり。いづれの所を占めて、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を休むべき。

この「したがはねば、狂せるに似たり」は『徒然草』の第百十二段「この心をも得ざらん人は物狂ひとも言へ」と同じく、外観の狂気を言っている。兼好は大略三十歳という年にこ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com